

負債と暴力 D グレーバー 著

以下、目次です。

第一章 モラルの混乱の経験をめぐって

第二章 物々交換の神話

第三章 原初的負債

貨幣の国家理論と貨幣の信用理論

神話を求めて

第四章 残酷さと贖い

第五章 経済的諸関係のモラル的基盤についての小論

 コミュニズム

 交換（エクスチェンジ）

 ヒエラルキー

様相間の移動

第六章 性と死のゲーム

不適切な代替物としての貨幣

血債（レレ族）

人肉負債（ティヴ族）

奴隷売買

暴力についての考察

第七章 名誉と不名誉 あるいは、現代文明の基盤について

名誉とは過剰な尊厳〔剰余尊厳〕である

名誉代価（中世初期のアイルランド）

メソポタミア（家父長制の起源）

古代ギリシア（名誉と負債）

古代ローマ（所有と自由）

いくつかの結論

第八章 「信用」対「地金」——そして歴史のサイクル

メソポタミア（前三五〇〇 — 前八〇〇年）

エジプト（前二六五〇 — 前七一六年）

中国（前二二二〇 — 前七七一年）

第九章 枢軸時代（前八〇〇 — 後六〇〇年）

地中海世界

インド

中国

唯物論 1 利潤の追求

唯物論 2 実体

第一〇章 中世（六〇〇 — 一四五〇年）

中世インド（ヒエラルキーへの飛躍）

中国：仏教（無限負債の経済）

近西：イスラーム（信用としての資本）

極西：キリスト教世界（商業、金貸し、戦争）

では、中世とは何だったのか？

第一章 大資本主義帝国の時代（一四五〇から一九七一年）

第一部：貪欲、恐怖（テロル）、憤慨、負債

第二部：信用の世界と利子の世界

第三部：非人格的信用貨幣

第四部：それで、結局、資本主義とはなんなのか？

第五部：黙示録

第二章 いまだ定まらぬなにごとのかのはじまり（一九七一年から今日まで）

結論：おそらく世界こそが、あなたから生を借りている [あなたに生を負っている]

あとがき：二〇一四年

グレーバーによれば、歴史は負債を軸にした金属貨幣と信用貨幣の交代としてある。借用証書を貨幣にすることから始まった経済の歴史は、やがて戦争捕虜や負債を抱えた人間を取引可能な奴隷とする身分社会に移行し、奴隷取引を通じて交換経済が始まった。そして、国家は戦争の大規模化に伴い、兵士を養うのに略奪しやすい貴金属から貨幣を作り、それを何処でもいつでも他の物と交換できる

よう戦乱の中から市場を拡大させた。また、税の徴収を金属貨幣にすることによって、市場を社会の中に定着させた。そのことが軍事力の強大化にもつながった。

近代社会も中世の現物中心の取引から、植民地争奪戦や奴隷貿易を通して金属貨幣の時代となった。奴隷制や戦争といった暴力に裏打ちされた金属貨幣と市場経済の全面化は、地域共同体を破壊し負債による社会支配を貫徹するようになる。物々交換から市場が生まれその後に国家が生まれたという経済学の定説は、資本主義を所与の自然のものとして正当化するための作り話に過ぎないことを、グレーバーは人類学の知見を使い証明していく。

そして現在、金という金属の裏付けの無い国家の信用による紙幣を、金属貨幣のシステムのまま発行しているという矛盾が資本主義の機能不全を引き起こしている。その端的な表れが、短期間に繰り返されるバブル経済破綻と、その度「借りた金は返す」というモラルを破り国家にたかる資本家の姿だ。過剰な軍事力とメディアを市場の下支えにする彼等にとって、この度重なる詐欺行為も恐るるに足らないのだろう。負債を抱えた庶民には、法に基づく容赦のない取り立てがなされ、よくて自己破産という選択肢があるのみだ。

しかし私たちは、負債を巡る壮大な5000年史を描くこの本のページをめくる度、人類は古今東西で債務を帳消しにし金属貨幣制度を打ち破ってきた歴史を持つこと知る。そして資本の全面的支配に喘ぐ無力な負債者こそが、自らの手で金融システムを作り出す力を持つ歴史的起動因へと変革していく様を感じずにはいられない。ベーシックインカムやブロックチェーンといったアイデアとそれを支える思想が民衆の運動と結びつく時、その流れは奔流となるはずだ。

負債論を読むと、掴みどころがないと感じる文化人類学や歴史の手がかりとなるので、そういう意味でもお薦めの本である。